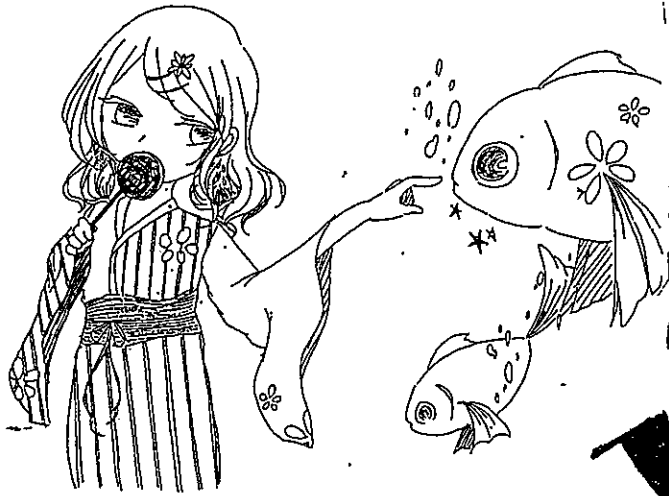


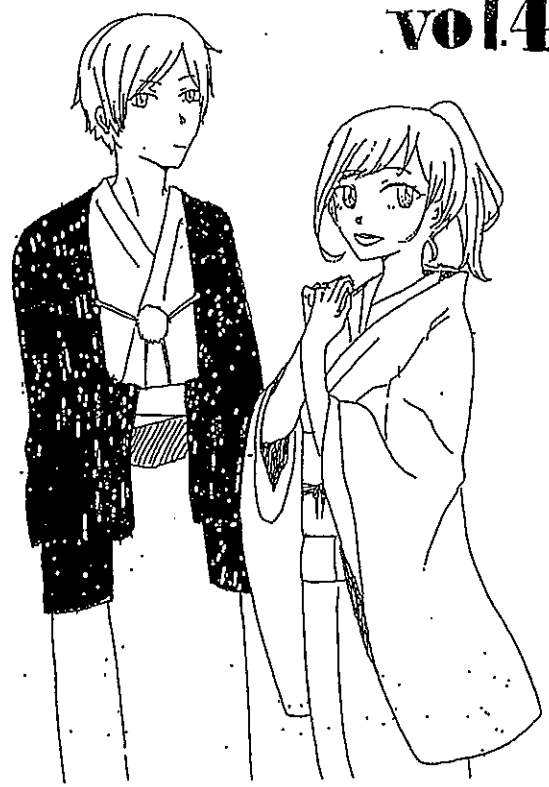
No.44

No.43



Poltada

vol.45 a



a

vol.46



YA広報誌『ポルトターダ』はWebサイトからもご覧いただけます
 稲城市立中央図書館 <http://www.library.inagi.tokyo.jp>
 トップページ>利用案内>中高生の方>ヤングアダルト(YA)サービス

受験あるある

都立一次入試(前)の時間割

1	数	自習
2	社	"
3	理	"
4	国	"
5	総	"
6	道	"

全部、自習。

自習。で言いながら、過去問のプリントを配って、「それ、やといてくたさーい」って言う先生がいる。
(え？先生、自習。で言、たか？)

都立一次入試(後)の時間割

1	理	DVD
2	家	読書
3	社	DVD
4	数	問題集
5	英	"
6	国	"

授業一切無し。

受験終わって、最後の定期テスト最終日まで4時間の日は近所に遊ばせられて、同じ学校の3年生にめちゃくちゃ遭遇する。

あー、おとしで授業は...



受験が終わってうかれぼんちまのいふんがす。受験勉強の女子女子たちとかが、かまわなかった行くとこでたまたま友達と「終わ、たらあをい！」と言っ合、結果予定の予定が乱れして混乱するこどす。...え？そんな私だけだ、って?? せーら、どう...だ、ね?



勉強場所に困っていませんか?

中央図書館の「読物言寄6

9時の開館と同時に、100名以上の閲覧席がほぼ満席に!!
「あ、受験生たちが」とか「定期試験前だね」とか、席のうまい具合で季節の移ろいを感じます。

←黙々と勉強したい→

↓
閲覧席。

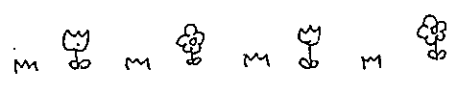
体験食堂学習室2 (利用カード提示)

←グループでディスカッションしたい→

↓
グループ学習室。代表者の利用カード、心算。(日430時間まで)

※予約もできます。(市内の方のみ)

- ・一週間前から前日まで
- ・4名~12名、最長5時間
- ・カウンターで申し込んで下さい



あ、合格したあは気が振けすぎで全く勉強しなくなつたの、今は知能が幼稚園児以下です。ニホも私だけ? ...そんなことないです。(嘘) せいせいはどうせなら、特に直前の定期考査は要注意です。えい!

えい、えい

おめでとう

ストーリーセラー

有川浩 (913.6/ア)

「仕事を辞めるか、この時死に至るか。
二つ、どちらです。」

そう宣告された作家の“彼女”

——— 到死性脳劣化症候群
思考がこと引き替りに寿命を失う病気。

“彼女”は彼女の夫＝“彼”を想い、
最後まで本を書き続けるか”……。

彼女の運命はどうなるか？

そして、最後に明かされる**真実**。

泣かずにほいられないイラストです。
彼を想う彼女。彼女を想う彼。
泣ける恋愛小説……!!
あさみ



そのバケツでは 水がくめない



アスカイ 4サ
飛鳥井 千砂
(913.6/ア)

友だちとの距離感がうまくとれ

ない。受け入れてもらえない。

相手との関係性で“おんなじ”ことは
ないませしか？

美如と親しくなるほどに自分を

見失なう理世。言っている

息苦しくなる!! 窒息にご用心

青くて痛くて脆い

住野よる
(913.6/ス)

今までの経馬倉からあまり人と関わろう
としない「僕」が、大学で出会った理
想を語る少女「秋好」とつづいた秘
密結社(?)「モアイ」をめぐり住野
よるさんいわく**最高傑作**の物語です。

もうこの世界にはいない「秋好」、
理想も目的も消えて変わってしまった
「モアイ」。秋好のため、もう一度昔
のモアイを取り戻そうと僕は走り
出します。モアイの幹部テンとは？
ヒロとは？「僕」を動かす誰しもの
持っているこの感情とは何なのか？
とても考えさせられる感動作です。

YA(ヤングアダルト) ボランティア募集

図書館でボランティアをしてみませんか？
広報誌「ポルターダ」を作ってくれる中高生を
募集中です！

グループでの参加も大歓迎です。

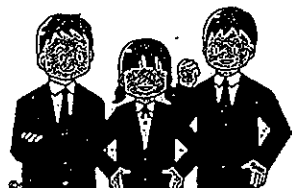
活動内容：年4回発行の広報誌「ポルターダ」の作成。
文章、イラストを掲載するほか、おすすめ
資料の紹介やオリジナル小説の発表など。
内容はみなさんのアイデア次第です！

興味のある方は図書館カウンター、

電話、E-mailにて

お問い合わせください。

ご応募お待ちしております！



電話：042-378-7111

E-mail: inagiliblibrary.inagi.tokyo.jp

やってみようビブリオバトル

去り1/5.行われたビブリオバトルで
紹介された本は コナウです。

夜は短く歩けよ乙女
森見登美彦(著) 913.6/モ

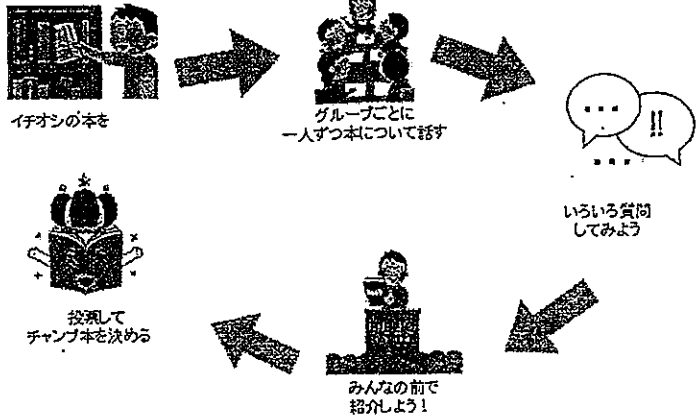
どんくろは偉人伝の
真山知幸(著) G280/マ

春琴抄の谷崎潤一郎(著) 913/9

キャスター-という仕事
国谷祐子(著) 699.3/7

世界の城塞都市の
一 个田嘉博(著) J290.9/セ

参加してみよう♡



「東京図書館朝刊」(<https://tokyo-toshokan.net/>)で紹介されています。

トッポ > 図書館訪問記 > 図書館のイベント・展示訪問記

> 稲城市立中央図書館 ビブリオバトル(2018年1月5日)

お久しぶりです。いあん
です。最近ホルターダに参
加できてすごく楽しみで、たの
びが今回参加できてすごく
嬉しいです。

最近語彙力が落ちて本
を読むスピードが落ち、こ
レショックで、たのびがす
べて受馬のせいだと知りまし
て改めて読書の大切さを知
りました。

本読んでー!

いあん

あつみです。

前回も、前々回も...と何回もぬけてしまっ
て久しぶりのPoltadaでした。orzorzorz

いやー、無事、高校が決まりました。友達もみんな
合格で、一段落つきましたね。よかった！
受験の話題はタイミーな話題でした。全然に
じれなかったらごめんください。

ストーリーセラーは文庫もハードカバーもどちらも
あります。あ、あと、新潮社エッセイの短編集(Story Seller)
にもものってます。ぜひ、読んでみてください!!
では、次回も会いましょうね。

YA 広報誌『ホルターダ』46号

2018年3月

編集・作成

YAボランティアの
いあんさん、あつみさん、アオイ紅葉さん。

あつみ

こんにちは。ホルターダ 46号は
いかがでしたか?

東京の春は早くも満開の
ようです。

この冬は寒かった分、春を。
新しい本をいっぱい読んでほしい!!

図書館 スタッフ

<http://www.library.inagi.tokyo.jp>

TEL 042-378-7111

FAX 042-378-7162

メール inagilib@library.inagi.tokyo.jp

稲城市立中央図書館(稲城市向陽台4-6-18)



—番外編— 放課後の図書室 その四—

アオイ紅葉

みなさん、こんにちは。高校二年生の平野真美です。私はいつも、ここ白川高等学園の図書室にある私だけの特等席で本を読んでいます。(このくんだり、あと、どのくらい続くんだろう……)

冬が過ぎてほかほかとした季節になりました。が、私は花粉症なので、春はあまり、好きではありません。まあ、春のいいところって言ったたら、桜が綺麗ですよ。桜が……。くっしゅん

(……今のくしゃみは我ながら、可愛くて女の子らしいくしゃみだったと思う。多分……) ポケットの中にあるポケットティッシュを右手で取り出しながら、左手で今読んでいた本の途中のページにしおりを挟む。ちなみに今読んでいるのは、志賀直哉作の『清兵衛と瓢箪』です。

この話をわかりやすく説明すると、主人公の清兵衛が瓢箪(ウリ科のつる性一年草)に熱中しすぎたあまり、周りの人間のことをよく見ようとしなかった主人公の自業自得の話ってところかな。

一見、「主人公、馬鹿じゃねえの?」って思う人もいるかもしれないんですけど、そうではないんですよ。

例えばこの話に出てくる主人公の町は、心の広い人たちがそろったいい場所ですが、主人公のお父さんは短気な性格の持ち主であり、主人公の清兵衛が横から口をはさんで意見を言ったときも怒っていたという話の一説がありました。

他にも、清兵衛の学校によそからきている教員の人はとても武士道を言うことが好きな男であって、まあ、わかりやすく現代風に言うと、体育祭の時にやたらと熱い男子みたいな感じだと思っただいて結構です。想像に任せます。

まあ、その教員が清兵衛の瓢箪を自分の授業の時間の時間に取り上げるんですよ。そこまでは「ああ、そんなに瓢箪はつきり気にしてるから……」って主人公が悪いって思うじゃないですか。でも、違うんですよ。

その後、その教員は声を震わして怒って「到底将来見込みのある人間ではない。」って言ったんですよ。昔にとってはひどい言葉なのにそんなことを言われる当たり前のようなことです。今になったら言葉の暴力でいじめに発展していますね。体罰とまでは行かないと思いますけど……。

私がこの作品を見て共感できるのは、大切なものを奪われた時の何とも言えない憎しみと悲しみですね。まあ、やっぱり……ダメですよ。人のものを勝手にとっては。みなさんも、そうは思いませんか?

ポケットティッシュから一枚ティッシュを抜き取って鼻水をチーンとかんでいると、図書室の勢い良く開いた音が聞こえた。

(このパターンは……も、もしかして……)
私は嬉しそうにドアの方を見るように、顔を上げる。

そこには私の天敵の露草欠(つゆくさかける)君と庭葉学(にわばまなぶ)君だった。

(なんだ……。今回の話は……。ドブか……)

そう思つて、私は軽く、鼻で笑つた。

今回出てくる人もイケメンなのに、個性が強すぎるキャラが出てくると思つた今読んでくれている読者の方々。今回は期待しないで、いただきたいと思いますね。

今回出てくるキャラは、二人ともふつつつです。はい、本当に。

露草君の隣にいる庭葉君は、テストでいつも、学年で二位を取っている成績優秀者です。クラス委員長と生徒会長を掛け持ちして仕事も完ぺきにこなしている露草君のクラスメイトだ。

(そういえばこの間、英語のスピーチコンテストで最優秀賞を取つて表彰されてたな……。やつぱり、頭いい人と私みたいな頭悪い人とは住む世界が違うわ……)

私はため息をついて、その横にいる奴に目を向けた。

庭葉君とは対照的に、何もかも普通の露草君は、何らかの原因で学園で人気のイケメンたちと友達らしい。まあ、毎回毎回、迷惑そうに見えたけど……。

(まあ、露草君の説明はこれでいいか……。というか、あの二人、何してんだらう……。まあ、イケメンな過去の人たちのことを考えたら、そこまで気にはならないけど……)

私は鼻をかんだティッシュを近くのゴミ箱まで持つて行って、捨てた。私のことはまったく、気にも留めずに二人は私の座っている席の近くに座つた。

今まで和やかに話しながら図書室に入つてきた二人が席に座つた途端、沈黙が続いた。(なんで黙つてんだらう……。この人たち)

私はしおりに挟んだページを開いて読んでいるふりをしながら、会話が始まるのを待つていた。

沈黙は五分間にわたつて終わり、最初に口を開いたのは庭葉君の方だった。

「……露草君、君は大切なものを奪われた時の悲しみが底知れないことだと知っているか？」

(いきなり、おもつ苦しい話題を投げかけてくるな……。この人)

「いきなりどうしたんだ、学君」

(まあ、そういう返事になるよな……。うん)

私は二人の会話に耳を傾けながら、読んでもいないのに今のページを一ページめくつた。

「いや……。昨日の出来事なのだが」

「うん。何？」

「僕は休日、地元の図書館で開館から閉館まで勉強と読書をするために訪れていることは耳に入れてあるだろう」

(さすが優等生……。休日までも優等生だ……)

「まあ……。初めて聞いた時は、「まじかよ」って思つたけど……。それが何？」

「昨日、いつものように訪れた図書館にいつもはいない男性がいたんだ」

「？普通じゃね？図書館なんだし」

(それな……)

私が心の中で共感しつつも庭葉君は、「まあきいてくれ」と話を続ける。

「僕はそんな彼の隣に座った。気になったんだ、彼のことか」

「うげえ……。やめてくれよ……学君まで。まゆちゃんみたいなのを言い始めて……」

(ホント、それな……)

「違う！真由澄君と同じ思考回路だと勘違いしないでいただきたい！断じてありえん！」

(速攻で否定したよ……この人)

「ああ、そうかよ」と相づちを立てながら、露草君は庭葉君の話を聞く。

「僕は最初、彼の外見から見て大学生だと思いついてたんだ。しかし、彼の机に置かれていた教科書にはみそら野学園女子中等学校と書かれていた。……なんと、その人は大学生でもなく、男性でもなく、ただのいかつい外見をした女子中学生だったんだ」

(何その話……。本当の話……。なの?)

「何その話？本当の話なの？」

(お前は私が思っていたことをさらっと言葉に出すな)

情けなくため息をついた庭葉君は、「残念ながら、紛れもなく事実だ」と言う。

露草君は「マジかよ」と言いながら、さつきよりも深く椅子に座る。

「俺は隣の人が女子であり、中学生であることに気づかないでいたことに深くその場で反省した。その時、反省の意を込めて書いた写経を書いた」

(え……。あのわけのわからない文章を……)

一瞬、眉がぴくぴくと揺れる。

「その時の写経がこれだ」

「え？あんの？」

「うわあ」と感嘆を漏らしながら、庭葉君の写経を見る露草君の表情は「思った通り」といった表情をしていた。

(え？持ってきてるのっ！みたい！)

私は本を戻すふりをして、二人の席の近くを通って写経を見る。写経は全部、達筆で書かれていた

(なんか、……学君、らしいな)

私はそう思いながら本戻さないでを持ったまま、席に戻った。

「で？どうなったの？」

「ん？これで終わりだが？」

「「はっ」」

庭葉君の言葉について反応してしまい、私も思っていたことをそのまま口に出してしまっていた。

(やばっ！)

思わぬ方向から声が聞こえたと思った二人は私の方を一瞬、見たがすぐに向き直って話

の続きを始めていた。

(た、助かった……)

ほつと息をついた私をよそに話は、クライマックスを迎えていた。

「……。ということだ。結論から言わせてもらおうと、僕が最初君に質問した大切なものは僕のその時の期待に満ち溢れた心であり、底知れぬ悲しみは彼は彼でなく、彼女だったという自分の観察力のなさから今回の事件を引き起こしたというわけだ」

「な、なるほど……」

(そこ、納得するところっ！??というか前半、聞いてなかったんですけどっ！)

私は気になって気になって仕方がなくなって、その場で立ち上がった。

二人は今度こそ、私から目を離さずにこちらを見つめていた。

私はスカズカと二人の方へ行き、仁王立ちして立ち止まる。

(さっきの話の……続き……聞きたい。い、言つて……教えてもらわないと……)

私が唇を震わせて口を開いた瞬間、露草君がふと、腕時計を見て、立ち上がる。

「やべえっ！俺、アイツらと帰る約束を無理やりされてたんだっ！遅れたら……」

「君の幼馴染にヘッドロックをかけられると思うぞ、露草君。僕も、同行をしよう」

「助かるぜっ！急ごう」

「露草君っ！廊下は走っては行けないぞ！」

「そんなこと言ってる場合かよっ！俺の命がかかっているんだから」

二人は荷物を肩から下げて慌ただしく、図書室を出ていった。

(私の……話は……聞いてくれないの……?)

私は肩をがくりと落として、その場で立ち尽くしていた。